

SNS 時代における撮影を前提とした芸術表現

——岡村芳樹の作品制作過程を事例として

久野榛花

近年におけるソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）は世界的普及を果たし、今や生活するうえで必要不可欠なメディアと化している。SNS の特異性ともいえる拡散機能は、次第に政治やビジネスシーンにも導入され、SNS をインターネット上のコミュニケーションツール以上に、社会に強い影響をもたらす主要なメディアへと成長させた。数年前まで強い影響力を持っていたメディアは、SNS の急成長によってその立ち位置を脅かされた。今の社会はメディアの転換期にあるとも言える。例に漏れず、芸術の現場にも SNS は導入され、美術館や作家個人が作品を写真や動画などをイメージに収め、SNS を通じて作品の流布活動を行うのも一般化した。

本論文では、SNS の登場が芸術の転機であると仮定し、SNS 時代の芸術の変化の実態を明らかにした。具体的には、油画家である岡村芳樹へのインタビュー調査を通じて、SNS を用いる作家が抱く作品制作意識の特異性を解き明かし、その結果をもとに芸術の移行を考察した。

現代の芸術の変化について、明らかにしようとする先行研究は幾つか存在する（横地・岡田 2007; 犬塚 2008; など）。本論文の意義は、芸術が変化する要因が、今日が SNS メディアの成長によるメディアの転換期にあることと定義したうえで、作品そのものではなく、作家の作品制作過程の意識部分に着目することで、芸術の変化を探ったことにある。

SNS 時代の作家には、レッドオーシャンの中で勝ち残るためのマーケティング意識が生まれていた。具体的には、作家性のパッケージング意識と作品の記号化であり、作家にとって避けられない意識であった。また、SNS を用いた流布活動が盛んになるにつれ、作品のauraは淘汰され、ハイパーリアルが現実となる世界が絵画の領域まで到達することが示唆された。しかし、SNS を用いる作家のリスクとして、作家性の揺るぎも無視できない。プリミティブな芸術の役割の再認識や作家性の再検討を行うことが、SNS 時代の絵画が、社会的により優位な立場を確立していく鍵となることが考えられた。